

耳を飾る

耳を飾ることは古くは縄文時代の^{けつじょうみみかざ}玦状耳飾りに始まり、古墳時代になると中国・朝鮮の影響により、黄金で造られた耳飾りが出現しました。その後明治時代に至るまで耳から物を下げて身を飾る行為は行われませんでした。現在はピアスやイヤリングがありますが、一般的になったのは近年のことです。



^{けつじょうみみかざ} 玦状耳飾り 上：^{やま だうえの だいい せき}仙台市山田上ノ台遺跡出土 縄文中期
下：^{きたはらかいどう いせき}仙台市北原街道B遺跡出土 縄文前期
(両者とも仙台市教育委員会蔵)

玦状耳飾りは石で作った耳飾りで、耳たぶに穴をあけて差しこみ、反転させてぶらさげるようにして使われました。また、北原街道B遺跡出土の^{けつじょうみみかざ}玦状耳飾りには^{ほしゅうこう}補修孔があり、^{ひも}壊れた後に穴をあけて紐でつないで使ったと考えられます。



^{どせいみみかざ} 土製耳飾り 上：^{さとはまかいづか}鳴瀬町里浜貝塚出土 縄文後～晩期
下：^{つづみじょう}迫町内出土

(上は奥松島縄文村歴史資料館蔵。下は当館蔵。)
土製耳飾りは鼓状をしたもので、耳たぶに穴を開け、丸ごとはめ込むようにして使われました。



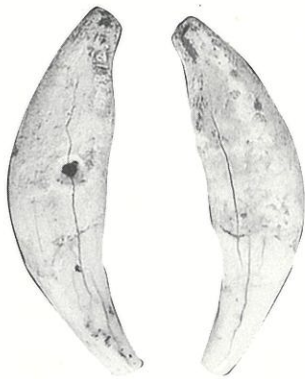
^{じかん} 耳環：^{やま ね ええよこあなぼ}石越町山根前横穴墓群出土 奈良・平安時代
(石越町教育委員会蔵)

^{こんごうせい}金銅製のものと思われませんが、^{と きん}渡金をしていたかは不明です。

首を飾る

首を飾ることは旧石器時代後期（およそ今から1万4000年前）から始まり、古墳時代にいたるまで動物の骨や牙、石、ガラス、琥珀、貴金属類を材料として行われました。その後、首飾りをつける行為は次第に行われなくなり、首飾りが再登場するのは明治時代、洋装の輸入に伴ってからになります。

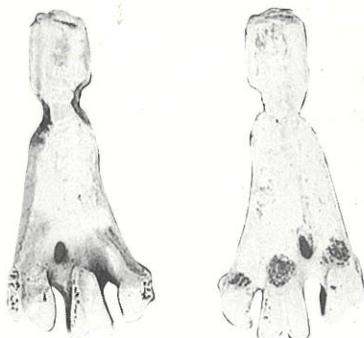
1



2



3



首飾り各種：鳴瀬町里浜貝塚出土（奥松島縄文村歴史資料館所蔵）

1 クマの牙製首飾り（未製品） 縄文中期 2 石製垂飾品 縄文中期 3 骨製垂飾品 縄文後期

1はクマの牙を首飾りにしようとしたもので、穴が貫通していない未製品です。2の石製垂飾品はサメの歯を石でかたどったものです。3の骨製垂飾品はトリの中足骨に横穴をあけて首にぶら下げたものと考えられます。



ヒスイ製装身具：仙台市大野田遺跡出土 縄文後期
（仙台市教育委員会所蔵）

日本国内のヒスイの産地についてはいくつか知られていますが、縄文時代から古墳時代にかけて利用したのは新潟県糸魚川産のヒスイだけでした。大野田遺跡の資料も糸魚川産のヒスイを使ったものです。

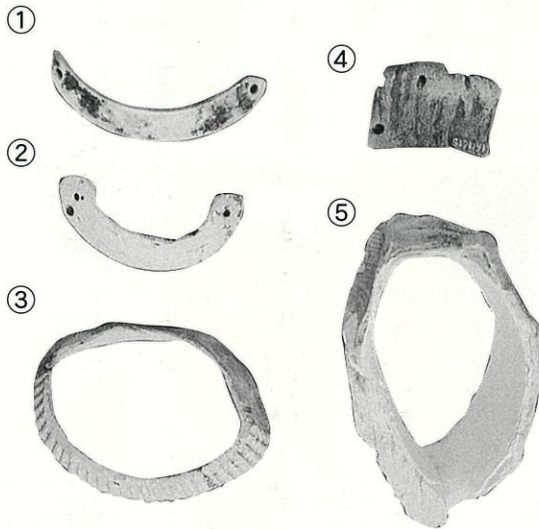
管玉 上：石越町山根前横穴墓群出土 奈良・平安時代
下：迫町佐沼城跡出土 古墳前期

（上は石越町教育委員会所蔵。下は当館所蔵。）

主に弥生・古墳時代に使われた玉類装身具の一つで、細長い竹管状の形をしています。碧玉を用いて作られるものが多く、展示資料も碧玉製のものです。

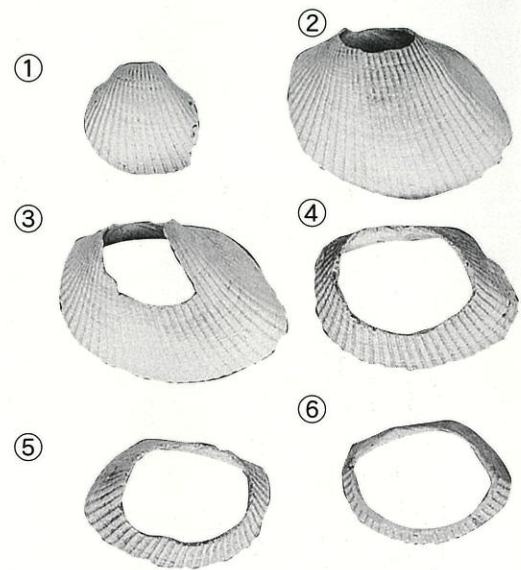
腕を飾る

腕を飾ることは、縄文時代に貝の殻に穴をあけた腕輪（貝輪）に始まり、以後、粘土・イノシシの牙・巻貝の殻・木・銅を材料にして作られました。古墳時代に入ると石を材料に宝器として作られるようになり、装身具としての腕輪はなくなっていきました。腕輪がアクセサリーとして再登場するのは明治時代になってからになります。



色々な素材で作られた腕輪：鳴瀬町里浜貝塚出土
（奥松島縄文村歴史資料館所蔵）

- ①イノシシの牙 ②ペンケイガイ ③アカガイ
④シカの角 ⑤アカニシ



貝輪の製作工程資料：鳴瀬町里浜貝塚出土
（奥松島縄文村歴史資料館所蔵）

縄文後～晩期

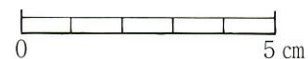
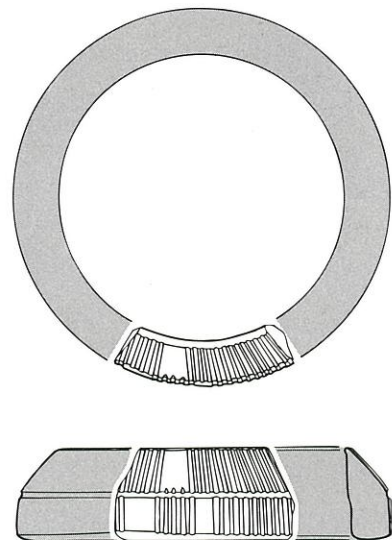
アカガイを使つての製作工程は、貝の高まりを欠き割り（①）、穴の部分を少しずつ外側に広げていきます（②～⑤）。⑥整形して完成となります。



石釧：名取市十三塚遺跡出土

（名取市教育委員会所蔵）古墳前期

石釧は南海産のイモガイ製の貝輪を碧玉などで模して作ったもので、このような宝器の出現によって装身具としての腕輪は無くなりました。



石釧の実測図面（名取市教育委員会提供）

石釧の残存から復元すると復元外径は7.4 cm、内径は5.6 cmになります。この大きさでは手首にはめることはできず、宝器としての腕輪であることがわかります。